

主中ち元
窮地 560^p

$\text{Zr}_{12}\text{Z}^{\text{P}}\text{S}_{17}$

小戸 2276 (141) 1035
 抑揚 2276 葉子 1035
 第 516 頁

あ の やまな ち
邪主 山脈 2234' 柳 谷 比 元 丸 54P
純上 134 山中 2440 1/2 5 476

根の国
 素戔嗚と櫛名田比売 奇稻田姫とは、
 東へ東へ 足音をも忍ばせ、命を削る思い
 で下っていった。
 中国の山脈の山嶺を縫うようにして、
 中国の邪き鬼の根拠地間近を、強
 硬に掻き潜って行くのである。すく北へ
 恐れ素戔嗚が拘奴国人の衣服を奪って着替え、
 拘奴国人の風俗習慣に合わせ、拘奴国人の言
 葉の抑揚を真似してすっかり拘奴国人になり
 すまじ、
 のり越えていったのだらう。
 それでも素戔嗚が絶体絶命の窮地に立た
 された時、何気ない風を装って助けてくれた
 のは、妻となった奇稻田姫であつたらうか。
 こうして拘奴国へ中国地方から母国へ出
 雲国へ近畿地方へ入った須佐之男と奇稻田
 姫とは、この地域の隅に住み着いた。
 近畿地方へ到った当初の頃、
 では、須佐之男は、何処に身を置いたの
 だらうか。

神代紀上第八段一書第六には、次のように

一、遂に根國に入りまゝ
 然して後に、素戔鳴尊、熊成峯に居ま

とある
もとのりなひちよ
本居宣長著

もとありのりなひちよ
本居宣長著

① 記伝は、熊成をクマナスと訓み、ナ

ス
L
は
フ
ヌ
L
と
同
く
、
熊
野
の
こ
と
と
す
る
。

②地名として、紀伊にも、
現在の出雲

と
い
う。
へ
「
日本書紀
」(上)
日本古典文学大系

八岐大蛇 (八人の長者達) か

山
岩
救
書
店
、
一
二
八
頁
、
注
六
參
照
)

つと
観察するところ

へ奇船田姫を力づくで奪い取った後、素戔鳴

は、
現在の
出雲国
に留ま
つて
いた
筈が
な

く 一目散に東を指した

と思われる

そこでこの物語においては

素多鳴たちは、東の丹国（現在の近畿）

地方へ到り、南下して先ず紀伊の熊野の峯

小屋
 後、
 途
 根
 国
 (難
 波
 あ
 たり)
 へ
 入
 っ
 た

410.11.8 紀上192^P 紀上196^P 2,457^P
の記載と合う。
死(生)112

であらう。
と左に居

まよは 小林^P
尾久 854^P

のであらう✓

と仮定してみたい。

崇神天皇

かつて、太伯も、ハツクニシラス天皇も、

いったん南方の僻隅(僻遠)の地に身を潜めた後

に時を見て、北方の平地へ打って出たよう

に観察される。(既述)

(熊成峯)を

それと同様に、素戔鳴も、南の紀伊山中

居処といた後、遂に北方の大阪の平地へ入った

のであろう、と思われ。

↑↑↑↑↑ 全くの当推量ながら、

へ紀伊の熊野の峯に居て力を蓄え、天下の

様子を窺っていた須佐能乎たちは、

ある時、背に日神の威を負うようにして、そ

の光に照らされて出来た影を踏みながら敵に

襲いかかり、根の国(難波あたり)へ入った

のであろう✓

と想像される。

(神武即位前紀戊午年四月条参照)

*

あ < 明々暮々 店 25th

「であらう」前頁
「であらう」決了3件「新」(4) - 134 a5 (大和を中への因 2, 458^P)

と想像した。

の
て
あ
ろ
ろ

周辺地域へ広がった

素交鳴は、
勢力範囲を、
紀伊国から難波

こゝで、

に思わす。

に母国の一部を奪い取り、従えていたよう

持ち前の支配力を発揮して、いやはや掴み取り

ともあれ、復讐の男は、並はずれた剛勇者

したかも知れない

き
な
ど
取
る
に
足¹
り
な
い
こ
と
と
打
ち
捨
て
、
放
置

けくわていたで、
――後方（母国）の騒め

川
夫
拓
奴
国
(中国)
は、
西
方
倭
国
と
の
戦
い
に
明

定かでない
い
か、
当時この地の覇権を握って

たのだらうか。

住者達はどうしてそんなにいとも簡単に許し

る
な
と
と
ハ
う
復讐
の
傍
若
無
人
ふ
り
を
、
先

一か一そ水
折さの
たも、
母国の一角を切り取

✱

隅 2455
禾4行

前頁

母國の隅から電光石火の如く台頭して

ここに素戔嗚は熊成峯(熊野)あたりの地

を紀伊と名付けたとであつたろうか

これは、肥後国の日肥伊(倭名鈔)に相

当する名であつたかも知れない。

また須佐之男は、新しく手に入れた難波

浪花(大阪府浪速)浪速(大阪市浪

速区)を中心とする一帯を日倭国(根

国)と名付けたのではなからうか。

思ひ返せば、須佐之男が主小在瓊の

耶馬台国でなく

祖国は、日倭の奴国(後漢書倭伝)と呼ば

れてゐたのだつた。(建武中元二年条参照)

か、先述の倭(倭)のように、

倭(倭)の母(つまり初代神功皇后)が

摂政となつたころ、極南界の日倭国は改称さ

れて日耶馬台国、女土國、倭面土國と

呼ばれることになつた。ハヤ女土國、女王國

の項に思われる。(第九章へ後漢へ再び朝貢

の項において既述)

鮑妹 16P 831-1/2 958-1/2 極南界 鮑妹 105P 2.459P 後漢書倭伝 57P 105P 建武中元 2年 倭国 倭口の極南界を 浪花 紀伊 191P たいどう 台頭 1343 電光石火 極めて短い時間 頭角を現わす

15P ニコ

2426-1/2

堅州國 記(四)44P
2426-1/2 221P
2460-3/3

2,460P-1/3

2426-1/2 月文
2426-1/2 月文

2485P
2485P

もしかしたら素戔鳴は、建国以来の祖国の名曰瓊国(「奴国」という呼び名に、言い知れない愛着を抱いていたのではあるまいか。)

こう一たわけで、婉ぎ取(と)る(ように)して手中に収めたこの新しい国を、須佐之男(すさのお)は日母(ひはは)の奴国(「根国」と呼ぶことにしたのであろう)先(ま)に述べたように

神代紀上第五段一書第六の末尾に、
「素戔鳴尊(すさのなるみこと)曰(い)く、吾(われ)欲(ほ)從(したが)ふ母(はは)於(を)根(ね)國(くに)、只為(ただため)泣(な)耳(みみ)。」

ハ對(たい)へて曰(い)く、たまはく、曰(い)く、吾(われ)は、母(はは)の於(を)根(ね)國(くに)に從(したが)はむと欲(ほ)ひて、只(ただ)に泣(な)かくのみ。ト(と)ま

「僕者(わがもの)欲(ほ)罷(や)罷(や)此(こ)國(くに)根(ね)元(もと)堅州國(けんしゅうこく)。」故(ゆ)哭(な)く

「僕(わが)は、此(こ)國(くに)根(ね)元(もと)堅州國(けんしゅうこく)に罷(や)らむ

「参(まゐ)りたり」とおもふゆゑに哭(な)く

とある。(「日本書紀」上)日本古典文学大系
岩波書店、五五五頁、補注一四〇「根国」
参照。第三十八章「須佐之男追放」の項において既述

ともあれ、この物語では、

→ H4. 3. 20 (金) 春分の日
但し、玉掛講習

2,460^P - 2/3

上町台地の先端は
「難波碕」と呼ばれた
④ 2465^P - 3/3

聖州④ 2426^P - 1/2
④ 2460^P - 1/3

素戔嗚尊は、母国（旧出雲国、現在の近畿地方）の奴国（根国、今の難波を中心とする一帯）の王になったと解釈したい。第三章へ素戔嗚尊の項を照すとここで、その昔、難波あたりの地形は、南から北へ向って細長く突出する半島状であった。（第327回参照）

すなわち、天王寺・住吉あたりにかけての地域を基部とし、大阪城北方の難波碕を先端とする岬が形成されていた。とリウ。へ「大阪府の歴史」藤本篤、山川出版、二五〇二七頁参照。

須佐能尊は、南から北へ向って、剣のように突き出たこの半島の基部あたりを根拠地とし、周辺一帯を統治したのであろう。

日本書紀（上）日本古典文学大系 岩波書店 一九一頁 注一九へ難波碕

*

$$2,460^P - 3/3 \quad (\textcircled{+} 2718^P - 2/4 \text{ と類四})$$

ひの
北売島

- 掲載下さい。

- 文字は全てゴ4



142G

「大阪府の歴史」藤本篤、山川出版社、昭和44年9月1日発行、25頁参照。

小林 98P
 身の毛 2128P 慌てふたぬ 79P
 2,461P-1/3

奪い取

こと

次頁!

銅鐸の二段階埋納

大カニワ 小林 85 返云 無し

その水では

へ丁度まさしくこの当時、つまり三世紀半

ばころ、難波近傍が大混乱に陥って

しまい、この地に一大変革が起った

ことを推測させる一つの事例について述べて

みよう。

須佐能尊は、熊成峯（熊野）から難波の地

めかけて急襲し、そしてこの地域をあととい

う間に奪い取ってしまったのであろう。

それはあまりにも突然のことだったので、

先住民達は、わけも分らず慌てふためき、逃

げまどつたに違いない。

だが人々は、そんな身を奪われるという身

のモ立つような脅威の只中にあつてさえ

それまで大切にしていた祭器、銅鐸を忘

て、いなくなつた。

信仰心あつた者は、後日掘り出すつもりで、

銅鐸を地中に埋めた

と、うは起到される。

素早へ

埋められた。しかしその後、隠した場所が分からず、銅鐸は土中に

おな
前末

2463-2/2

Spile 2461^P
あとへ
野部 市内字 126^P

2462^P 69
2,461^P-2/3

次のような、特筆すべき考古学上の成果が得られたという。(以下「朝日新聞」平成

元年十一月十一日付へ埋納されたまま銅鐸出土。弥生時代末期以前か(参照)

「大阪府八尾市春日町一丁目の跡部遺跡で

末頃」に作られた排水溝の下から、埋納され

たままの「土に埋まった」状態の銅鐸が、完

全な形で出土した。(写真図版 405 参照)

発掘現場は、JR八尾駅から西へ約五百

の公共下水道工事用地。地下約二・五メートル

粘土質の土中から見つかった。高さ四十七

底の長径二十三センチ、短径十九センチ。表面には、

水の流れるような模様が刻んであり、弥生時

代中期に作られたと考えられる。銅鐸は、

この銅鐸は、頂点を南東に向き、ヒレを

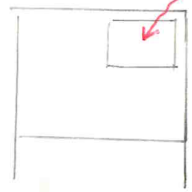
上下に位置させ、横に寝かせるようにして、

埋納坑(長さ六十センチ、幅二十四センチ、深さ三

十センチ)に納められていた。排水溝(幅約

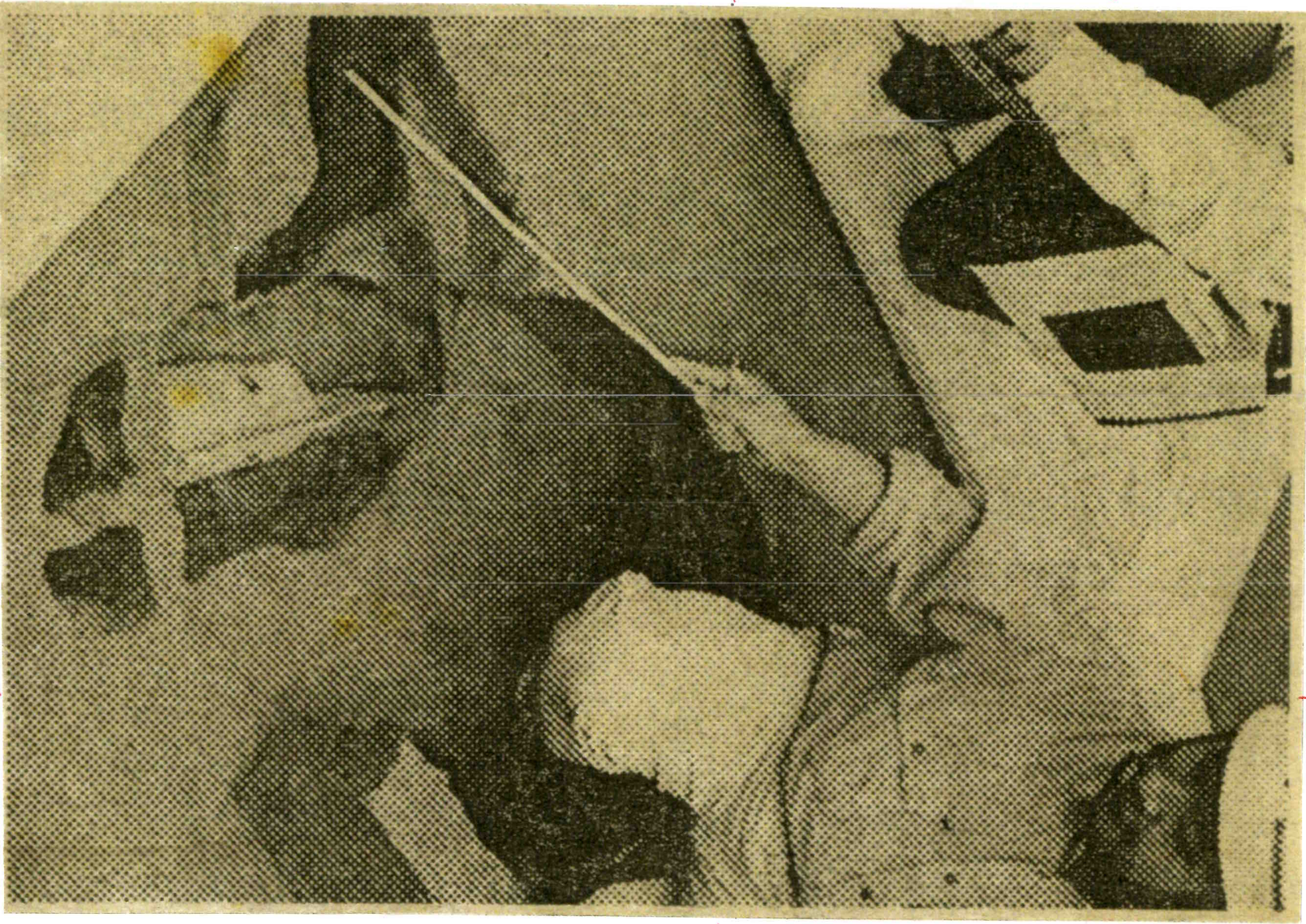
五十センチ、深さ(現時点迄残っていた深さ)六

左頭
上段
左半分
掘載下され。



カギ

2,461^P-3/3



カギ

59

1309
1409

写真図版 405 3世紀中ごろ埋められた銅鐸

「朝日新聞」平成元年(1989)11月11日付、埋納されたまき銅鐸出土、八尾市参照

三世紀 中ごろ 2461 最中 897 戦争 幾人か争つ 物と争はう 2,462 P 宗子 長子

6行 終末期

終が斜めに横切っていた。
地層からみて、排水溝は弥生時代終末期に
作られたものと判明した。

というのである。

この銅鐸は弥生時代中期(前)に作られた。
この銅鐸が地中に埋められた時期は、弥生

時代終末期以前のことであつた。
という推移が示されている。(第3表参照)

もしかしたら、

卑彌呼(二代目の天照大神)が正始中

二四八年に死去して、男王須佐元男が立

ったものの国中服さず、卑彌呼の宗女田心

姫年十三が女王となり、国中遂に定まった。

須佐元男は倭国から追放された素戔嗚は、

拘奴国の東の母の根国(難波あたり)へ突然

襲いかかつていった。

その戦争の大混乱の最中、銅鐸は土中

に埋められた。

しばらくして、弥生時代終末期(三世紀中

末頃)となり、土の中に埋められてい
る銅鐸のすぐ真上に、排水溝が作られた。

2704P
終極
掛移

という経緯があったのではなからうか。

「これまで、日本全国で四百個余り出土し

ている銅鐸のうち、埋納されたままの状態で見

い出されたのは、本件以外に五例あるが、い

れも地層などから年代を判定することはい

なかつた。そこで埋納時期については弥生時代

後期から古墳時代まで議論が分かれている

という。

では、この八尾市春日町の跡部遺跡の銅鐸

発掘の結果から、銅鐸は弥生時代終末期以前に

終局を迎えたと言いつけるものであろうか。

いや、そうは断定できない。

近藤喬一・山口大教授（考古学）は、

「五十坪前後の小さな銅鐸をいったん埋納

するようなことがあったとしても、銅鐸が作

られなくなったわけではなく、やがて一応を

超える大きな銅鐸を造るまでになり、一

古墳時代の前にそれらを埋めた

といった二段階埋納説の立場をとってい

るという。（「朝日新聞」平成元年十一月十

一日付へ埋納されたまま銅鐸出土。弥生時代末期以前か（参照）

もったも、この物語では、へ二段階埋納という経過をたどったのは、大阪湾沿岸地域だけであつたろう。

と考えてみた。

①素戔嗚尊、大阪湾沿岸地域では、母の根国を建国したころ。

第一回目の銅鐸埋納が行なわれた。

②弥生時代の終末期に、母国（出雲国）の国譲りが行なわれ、このころ更にもう一度、銅鐸が埋納された。（後述）

という（こと）なのであろう、と推察される。

察するところ、素戔嗚尊のおよびその子孫達は、土着の者達に対してかなり寛大であつたようである。

へ土着民達が昔ながらに銅鐸を作り、祭器としてあかめるのを咎め立てないどころか、反対に、大いに奨励していた。

か、反対に、大いに奨励していた。

H31(2019)1.29(火)~1.31(3回)
令和元(2019)7.6(土)~7.8(3回)
令和2(2020)2.15(土)~2.16(4回)

2,464^p

「の項において」不要

天つき
改行

1/16
1/15
1/16

*

ようにさえ見受けられるで
大阪湾沿岸でも他の地域と同様に
の後長らく日銅鑠が使用され続けてゆく
のであるが、そのことについては違
壊滅し。第四十五章「母国（出雲国）の国譲
り」において述べたりや
第四十四章「東の拍奴国」

大隅島 380' 社上
大隅亭 "

紀工150 天日臨宮
紀工156 通寶宮

靖の警名場
②2467 (組) 56
-2/2

奇形团W: 82/21°

24

14x721

神代記に
速須佐男命、宮造作るべき地を出雲国に求む。たまひきりかして、
須賀の地に到りまて、そこに宮を作りて坐しきとある。

八雲立つ出雲

素々々々鳴




出雲国

今の近畿地方

に根拠を創建した頃のことであつたろうと思

復素交鳴

は、
客

作
3
^

地を母国に出雲

国) の内に探して、口須賀 という所に宮を

建たた

(神代記略照)

但し、神代紀上第八段本文には、
清地

神代記上第八段一書第一には、
 乙清^アと記す。

7
11
3
0


 子
 下
 は、
 五
 須賀
 賀
 五

清す
地か
清す
か

は、
と、
に

にあつたのたろうか。

ト
ル
う
ま
で
も
な
く
明
言
で
き
な
ト
ル
と
で
は
あ

い
の
の
二
の
物
語
で

上野台地から、コスカ（スカ）と呼^よばⁿ水

ていたの~~でた~~まろう

と仮定してみたい。

万巻十四
二五七五
に
功の
うに
歌水
水

7
11
3

な...その...で...
て制止す
な(割詞)
330 標示つて

万3-457

万3-457
万3-140 注

万1181

ハマヒルガオ
Sfile 2465-2/3
2,465-2/3

トル

トル

美夜自呂の須可辺に立てる
咲き出で夕ぬ 隠めて惚はむ
貌如花

美夜自呂は、地名。
ハマセルガオ(砂浜を這い群生。ビルガオに似て、色の濃花を咲かせる)

朝顔・カキツバタ・ムクゲ

オモタカ(或いは美しい花の)など、説が有力。

須可は、水や海水などによつて生じ

砂地・砂丘・浜すかのことである。中部

小高い所などをスカサというのは、中部

地方以東の地に多い、という。(「万葉集」

(三) 日本古典文学大系、岩波書店、四五七頁
「広辞苑」へすか(参照)

「大意」美夜自呂の小高い丘の辺に立つ
咲かす心の内で慕い合つていましう。

母国へ所蔵地方や中部以東の地に住んで

砂丘や小高い丘のことを、須可と呼んで

いたのかも知れない。
難波の上野台地について、次のよ

⑦ 2467-1/2
249 父

28

なお素多鳴は子々および義理の父母を「スガ」^{スガ}という名で呼ぶことになる。(後述)

元(57)上 57P
今集 50, 51P

元(57) 57P
注10 2,466P-1/3

元(41) 41P
元(57) 57P
元上123P 15P

元(57) 57P
注10

「古事記」新潮日本古典集成、五八頁、注
一、二句切れ、四句切れ、かつ同語の反復を用
いてゐる点は、古色を存してゐる、という
三十一文字(和歌)の初めといわれる。
この歌は、俗に「ハ雲神詠歌」と呼ばれ、
を籠らせるために新居の垣を作っている。新妻
の八重にめぐらした立派な垣よ
雲にゆかりの出雲の国で、雲が幾重にも立つ
ように幾重にも新居の垣を作っている。新妻
を籠らせるために新居の垣を作っている。そ
の八重にめぐらした立派な垣よ
作った。ハ記、ハ内は紀
ハ雲立つ出雲八重垣
妻籠みハ重垣作る
そのハ重垣を
ハ盛んに雲が立ちのぼる。その湧き出る
雲にゆかりの出雲の国で、雲が幾重にも立つ
ように幾重にも新居の垣を作っている。新妻
を籠らせるために新居の垣を作っている。そ
の八重にめぐらした立派な垣よ

地とう
2465P-1/3
右端

元(57) 57P
注10

の地図 魚

揚子江のP

京都市地図 本堂路という
町名があった。

$$2,466^P - \frac{2}{3}$$

あたごさん
愛宕山
元 41

大坂
寛政11年7月15日

40 ± 5590

大40, 山城など

137
T41V

紀上123^P
古今51^P

68

2.466^P-³/₃

左岸 聖
川の下流に向かう
その時 市2630^下 1/3
大和親社 11
和科 127^下 1/3
大阪府北
の北側
5万の地図にはない
下

②283
1/2

第1巻
新や(1)
-113頁
表5表

むし(第一・五表へ初代大己貴)参照
乃ち、相與に^{みとのまへは}て、^{みにおほあるむちのかみ}兒大己貴神を生
はて^{すなは}る。
さて、神代紀上第八段本文には、こう記さ

おほあるむち
大己貴の誕生
たんによう

*

とある

和敬、学生社、十九頁、三四頁参照)
と呼んでゐる、という。^{第334頁}「大神神社」中山
この川の左^{北側}の岡^{おが}一帯を、現在も「出雲屋敷」
方には「狭井川」(古事記に佐韋河)が西流してあり
三輪山を御神体とする大神神社の社殿の北
二・五^五に「出雲」がある。
奈良県桜井市の三輪山(四六七m)の東南
には、出雲井町がある。
大阪府東大阪市近鉄枚岡駅の東。五^五
に「出雲町」がある。

⑦ 2483^P

紙上 124

記(茶) 57^P
記(茶) 41^P

記(茶) 41

如上 $123^7, 124^0$ 行

記(星)57P

初(黑)57

紀上/23

$$2,467^p - \frac{1}{2}$$

知上/23P

⑤ 2441

記(黑)5

57⁷ (足名鉄)
54⁷ (足名鉄)

547 (足名)

4-6-2 2285

記(黑) 57.

茶 225

紙上123^D

文 適合元祥
2125

[illegible]

すさのさ
素又鳴と奇稲田姫
なだひめ

2441
13斤

13斤

H30(2018)6.17(日)~6.18(4回)

正

地名 1625

車称 ①1892⁷
②2034⁷
③2465⁷ 3/3 3/4

2.467^{P-2}

かる 軽 ①1894⁹
いやい

すか ①2470^{0-1/2}

①2465⁷ ②2470^{0-1/2} ③2470^{0-1/2}

大分 1769⁰
美 吳 漢
ミセ

米

著出版へ「夕陽岡」(参照)

という。「帝国地名辞典」太田爲三郎、名

側は急な崖になつていゝ

寺の西方一帯「丘陵地」の地名であり、その西

「夕陽岡」(夕陽ヶ丘)は、大阪市南区天王

だつたのかも知れない。

「車称」については、第二十七章「車称」の項において既述

なるといつた意味を、^{①1865}「車称」の項において既述

「八嶋手命」の地、^{①1865}「車称」の項において既述

「清(須賀)の地」の地、^{①1865}「車称」の項において既述

「清(須賀)の地」の地、^{①1865}「車称」の項において既述

「清(須賀)の地」の地、^{①1865}「車称」の項において既述

「清(須賀)の地」の地、^{①1865}「車称」の項において既述

「清(須賀)の地」の地、^{①1865}「車称」の項において既述

「清(須賀)の地」の地、^{①1865}「車称」の項において既述

「清(須賀)の地」の地、^{①1865}「車称」の項において既述

「清(須賀)の地」の地、^{①1865}「車称」の項において既述

「清(須賀)の地」の地、^{①1865}「車称」の項において既述

「清(須賀)の地」の地、^{①1865}「車称」の項において既述

「清(須賀)の地」の地、^{①1865}「車称」の項において既述

「清(須賀)の地」の地、^{①1865}「車称」の項において既述

「清(須賀)の地」の地、^{①1865}「車称」の項において既述

「清(須賀)の地」の地、^{①1865}「車称」の項において既述

④ $2493^p - \frac{7}{2}$

苗2468ⁿ $\frac{4}{4}$
强

やちほののみ
ハ千戈神

須佐之男は、一際擢人であつた存在となつてゐた

だ^だが^がい^いな^なが^がら^ら 素^す交^こ鳴^{めい}は^は、い^いよ^よい^いよ^よも^もっ^って^て
 慎^{しん}重^{じゆう}に^に、言^{げん}動^{どう}の^のは^はし^しは^はし^しに^にま^まで^でも^も注^{ちゆう}意^いし^して^て、

己の出自を拘か奴ぬ国こくの者達ものたちに悟さとらぬないよう

鐸^{たたく}を^い神^{しん}聖^{せい}な^ももの^もと^もして^も扱^{あつか}い^も、^も言葉^{ことば}も^も服^{ふく}装^{そう}も^も

地元民になりすま
表向き、母

国（出雲国）の中に入り込んでしま
つていた。
もくろいづくもいづもい

奇国人（出雲人）となりきってしまふ以外

母国(人)へ出雲(人)になりきってしまふ。以て
に、須佐(男)の生きる道(みち)がなかつたのであろ

う。
とはい
え、
素直な馬鹿
の心の
中には、
愛し難

い
孤高の誇りがある
私（き）は、荊蛮（けいばん）の地（ち）に生（は）つて吳国の基礎をつ

と	く
い	た
う	た
思	太
い	作
か	の
ゝ	子
復	孫
佐	な
え	の
男	た
の	し
胸	むね
の	うち
内	を
き	搔
搔	か
き	た
立	
て	

④ 2493^P

⑤ 2452^{12-1/2}
→ 1044 187Pキ

⑥ 2493³

⑦ 2468^{P-2/4}

大根 ほとあみ

ひつてき
匹敵 1893

⑧ 520⁹
⑨ 524⁹

るのたつた。(第六章へ呉国への項参照)
素のたつたは密かに
へ根国をもつと強大な国にして
何時かそのうち、拍奴国を奪い取りたいと切望した。
そのためには、先ず何はともあれ、武器を大量に作って、隠し持たなければならぬ。
根国の王は、大胆不敵にも、縄文晩期に渡来した扶余系殷民の子孫達に指示し、九州地方の兵から奪い取った銅戈から型をとったのてあろうか。銅戈の鑄造を数多くの口銅戈を鑄造させ、蓄えていた。実戦用の密かに、こうして、①すでに述べたとおり、九洲で二十例、大阪で一例外、発見されている。

祭用と思われる

④2493^P- $\frac{1}{2}$ 祭

新(2) 205^P

サミ 小林10/16^P << 括る
関 <<リ ④2494^P- $\frac{1}{2}$

小林428^P 2,468^P- $\frac{3}{4}$

(1)

北九州市史と文化遺産 30^P

39年④2439^P 葛神、加茂 2448^P

という。(第三十九章八荒神谷遺跡。加茂岩倉遺跡)の項において既述)

②また、昭和四十六年に、大阪府茨木市東奈良

遺跡で、銅鐸の銕型三十五点、銅戈の銕型三

点、ガラス製勾玉の銕型などが発見された。破片

「戈は、中国を起源としており、柄に身を直交するように取り付けた武器の一種である。

北九州で出土した銅戈の銕型は、い

ずれも石型である。その小に対して、東奈良から

見銕型は粘土型であった。そして、発見さ

れ出された

小た三点の銕型片に彫られていた文様などの

型式から、日大阪湾型銅戈の銕型であるこ

とが判明した。

三点の銅戈の銕型のうち、二点は関部(括

部)で一点は鋒部に湯口(溶かした銅を流し

込む口)が設けられていた

という(写真版80)「茨木の歴史と文化遺産」

茨木市・茨木市教育委員会、平成二年三月三

十日第二版、三〇頁、三二頁参照)

日大阪湾型銅戈について、第三十九章

八大阪湾沿岸の特殊な文化の項において述

⑦ 2452^{P-1/2}

2,468^{P-44}

記第226 記では八千銓 記(世)58^P
紀上128^P 八千の4年
紀上215^P

1行P中

紀上128^P

へた
い。

＊

素佐え馬

とも呼ばれた
ハ千^{ヤチホ}神^{カミ}は、
この名は子孫へと踏襲されて

いたのであろう

日本書紀

と考えてみたい

ハ千^{ヤチホ}神^{カミ}参照

神代上第八段一書第六

男の子孫へ参考迄に述べると、神代へ須佐え

ハ千^{ヤチホ}神^{カミ}とあり

ハ千^{ヤチホ}神^{カミ}の字が用いら

ている。

現在のところ、中国・近畿地方で銅銓の鑄

型は見出しでいらないようであるが、

素佐え馬 およびその子孫達は、銅戈^{ドウカ}銅劍^{ドウケン}は

りでなく銅矛^{ドウボウ}も、そしてさらに銅劍^{ドウケン}

をも蓄えていたのか、知れない。

＊

ではなかろうか

2.469^p

新や
(2) 「かすたのり」 2468^p
2236
-4/4末 電0

さいの さいの
あは 内結

国地方へ、母の根国（大阪府・奈良県・和歌
山県一帯）等の各所で、鉄器を作っ
ていたのであらうと
と観察される。

■あるいは下
紀伊国の山奥などで、人し水が回ると鉄製
の武器を作製し、蓄えを徐々に増やすとも
に、一兵の訓練など行なっていたのか
も知れない（第四章へ倭人達の極秘裏の
製鉄）
第七章「軍人の練兵場」参照

*

690
1/2

15.20
の項を
76

2468-241659

たぐ 遅れ 1364 250年 秘伝 266年 田ハ 2月の 刊 2971 3992 1365
思 3327 思 3326 2461-2/2

2,470^P

2021 9/19

素佐の男の死・荒陵
素佐の男の根国は、着々と武器や武具を
作り蓄え、兵力の強化に励んだ。
こうして、幾年月かが、瞬く間に打ち過ぎ
ていった。
素佐の男と奇稻田姫との間に生れた子
は、清（須賀）の繫（リタ）の坂の主・御名は猿
彦ハ島士収美は、悪童共を率いて放埒の限
りを尽し、末頼もしい腕白ぶりを示していた。
素佐の男は、根国の基礎固めのため、愈々益々
多忙な毎日を送った。
だが、時として素佐の男は、ふつと気が付
くと、我知らずいつの間にか海の向うの故
郷に想いを馳せていることがあった。
そんなとき、きまつて素佐の男は、夕陽
の丘に立ち、いつと海の彼方を見詰めていた。
真赤な太陽が、空と海を赤く染めながら淡
路島の山々の向うへ沈んでゆく。
と、素佐の男の心は、熱い思いで一杯
になるのだった。
押え難いのは望郷の情である。太陽が沈

紀上412 P 同文 2474 P-2/2 69
③132-2/2

新文(17-12頁)

2,471-1/2 P 同文 ④132-2/2 4127 P-3/3
17.8ひみせざき ⑤ 太子の料長殿

1げき 云 957 P
刺激

素王の鳴 ^{すわのなる} は、^{かぬ} 拍奴国人達を刺激し、^い ないよう
に極めて用心深く、^{きわ} けり、^{ようじんぶか} けり、^い かし、^{ちがらつよ} 力強く生
きた。
素王の鳴 ^{すわのなる} は、^い この母(近畿地方)の
根国(難波あたり)で、^は その波瀾万丈の一生
を終え、^お けり。
素王の鳴 ^{すわのなる} は、^い あるいは西方を望む
夕陽ヶ丘に葬られたのではなからうか
言うまでもなく、^い 全く確証は無いものの、^い
あるが、この物語においては、^い
へ四天王寺西南にこんもりと盛り上って見
える夕陽ヶ丘の孤立丘に茶臼山(荒陵)が
素王の墓なのであろう。^い
と仮定してみたい。^い
ここに、茶臼山(荒陵)について、^い の概要
を述べておこう。
仁徳紀五十八年五月条には、^い
「荒陵の松林の南の道に当りて、^い 忽ち雨の

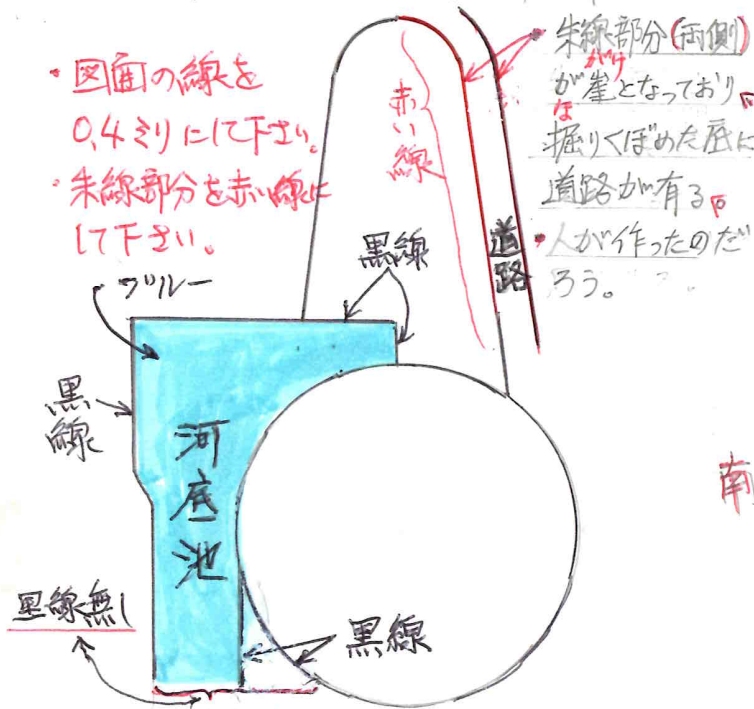
・頁の上方に又つ並らへて掲載下さい。

・カラー

・写真をカットしないで下さい。

＊前方部の先端は、丸みを帯びている。

・図面の線を
0.4ミリにて下さい。
・朱線部分を赤い線
にて下さい。



第328回茶臼山古墳概略図
(直経約130m)

1369

西(大阪湾側) 2471^P-2/2



南

北

2471^P
最大直径
約130m

1429 写真図版 406 茶臼山古墳 (東から西を望む)

『航空写真集 飛んで飛んで大阪』大阪新聞社、平成3年(1991年)1月30日発行、54頁参照。

12
2
9

古代には「荒陵」(荒墓)と呼ばれた。茶臼山の呼称は、中世以後のこと。現在、茶臼山古墳(大阪府史跡)とよんでいる。形状や周壕からみて前方後円墳であるが、被葬者は不明。後円部裾の河底池は、前方部の半は「あたりまで」

ある。〔「大阪府の歴史散歩」(上)山川出版社、1987年10月30日1版10刷発行、49頁他参照〕

歴木(自) 桐とも書く(生)ひたり。路を挾
みて末は合へりし
と記されていいる。
・察するところ、
荒陵の南の道に二つの日鳥居(つま
り木の門)が立てられた
という意味なのであらう、と思われる。
② また、推古紀元年是歳条に
「始めて四天王寺を難波の荒陵に造る」と
ある。
③ もつとも、上宮聖徳太子伝補綴記には、
「覆奏於王造、王造、東岸上、即以營爲四天王
寺、始立垣基」(中略)四天王寺後
遷葬墓村と述べる。これに
と述べられ、補綴記によると
「四天王寺は、当初王造(大坂城付近とい
われる)に造られ、後に難波の荒墓村へ遷
されたとある。これに
ともあれ、四天王寺は、難波の荒陵(川荒

⑦ $132^{\circ} - \frac{1}{2}$ $\rightarrow$
 541.2481
 2479^p

⑤ 2481^P

5 file 2473
2481

④ 132' - 3/2 同文
 2473 p
 2481 p

$$2.473 - \frac{1}{2}$$

うす かん
磨 1601^P
④ 399⁷

60 ± 412^P ± 5
② 下サ3

7117
⑤ 2471 - 1/2 1759

⑦ $3,622^p$

といふ。(「朝日
解きへ」参照)

白山古墳と1丁の史跡指定を行った

十七年には府文化財保護条例に基づき、茶

南側の池
(河底池)
を史跡に指定し、昭和四

その後大阪府は、昭和十四年に茶臼山及びひ

は、前方後円墳の後円部とみなされた。

報告書において、この茶臼山（標高二七〇）

昭和七年に刊行された梅原末治京大教授の

岩波書店、四一三頁、注五参照

といふ。
へ
日本書紀
上
日本古典文学大系

丘 曰 茶 曰 山 丘 の こと であらう

茶磨山 (ちやうすやま)

「荒凌（川）荒墓」は、四天寺西南の孤丘

(2) そーて、
一ツサ
ク

和名抄の指し国西方嘉兵衛宛
は二小片に三分る

[illegible]

四
三
手
の
市
手
P
参
定
に
日
荒
麦
郎
の
水
冠
元

[illegible]

日	あ
光	ら
夜	は
口	か
(	
荒	あ
臺	ら
寸	む
)	う
こ	
つ	み
い	た
て	は
、	お
欠	た
の	と
ふ	ま
う	な
く	ん
い	

四天王寺
 三
 二
 一
 0
 -1
 -2
 -3
 -4
 -5
 -6
 -7
 -8
 -9
 -10
 -11
 -12
 -13
 -14
 -15
 -16
 -17
 -18
 -19
 -20
 -21
 -22
 -23
 -24
 -25
 -26
 -27
 -28
 -29
 -30
 -31
 -32
 -33
 -34
 -35
 -36
 -37
 -38
 -39
 -40
 -41
 -42
 -43
 -44
 -45
 -46
 -47
 -48
 -49
 -50
 -51
 -52
 -53
 -54
 -55
 -56
 -57
 -58
 -59
 -60
 -61
 -62
 -63
 -64
 -65
 -66
 -67
 -68
 -69
 -70
 -71
 -72
 -73
 -74
 -75
 -76
 -77
 -78
 -79
 -80
 -81
 -82
 -83
 -84
 -85
 -86
 -87
 -88
 -89
 -90
 -91
 -92
 -93
 -94
 -95
 -96
 -97
 -98
 -99
 -100
 -101
 -102
 -103
 -104
 -105
 -106
 -107
 -108
 -109
 -110
 -111
 -112
 -113
 -114
 -115
 -116
 -117
 -118
 -119
 -120
 -121
 -122
 -123
 -124
 -125
 -126
 -127
 -128
 -129
 -130
 -131
 -132
 -133
 -134
 -135
 -136
 -137
 -138
 -139
 -140
 -141
 -142
 -143
 -144
 -145
 -146
 -147
 -148
 -149
 -150
 -151
 -152
 -153
 -154
 -155
 -156
 -157
 -158
 -159
 -160
 -161
 -162
 -163
 -164
 -165
 -166
 -167
 -168
 -169
 -170
 -171
 -172
 -173
 -174
 -175
 -176
 -177
 -178
 -179
 -180
 -181
 -182
 -183
 -184
 -185
 -186
 -187
 -188
 -189
 -190
 -191
 -192
 -193
 -194
 -195
 -196
 -197
 -198
 -199
 -200
 -201
 -202
 -203
 -204
 -205
 -206
 -207
 -208
 -209
 -210
 -211
 -212
 -213
 -214
 -215
 -216
 -217
 -218
 -219
 -220
 -221
 -222
 -223
 -224
 -225
 -226
 -227
 -228
 -229
 -230
 -231
 -232
 -233
 -234
 -235
 -236
 -237
 -238
 -239
 -240
 -241
 -242
 -243
 -244
 -245
 -246
 -247
 -248
 -249
 -250
 -251
 -252
 -253
 -254
 -255
 -256
 -257
 -258
 -259
 -260
 -261
 -262
 -263
 -264
 -265
 -266
 -267
 -268
 -269
 -270
 -271
 -272
 -273
 -274
 -275
 -276
 -277
 -278
 -279
 -280
 -281
 -282
 -283
 -284
 -285
 -286
 -287
 -288
 -289
 -290
 -291
 -292
 -293
 -294
 -295
 -296
 -297
 -298
 -299
 -300
 -301
 -302
 -303
 -304
 -305
 -306
 -307
 -308
 -309
 -310
 -311
 -312
 -313
 -314
 -315
 -316
 -317
 -318
 -319
 -320
 -321
 -322
 -323
 -324
 -325
 -326
 -327
 -328
 -329
 -330
 -331
 -332
 -333
 -334
 -335
 -336
 -337
 -338
 -339
 -340
 -341
 -342
 -343
 -344
 -345
 -346
 -347
 -348
 -349
 -350
 -351
 -352
 -353
 -354
 -355
 -356
 -357
 -358
 -359
 -360
 -361
 -362
 -363
 -364
 -365
 -366
 -367
 -368
 -369
 -370
 -371
 -372
 -373
 -374
 -375
 -376
 -377
 -378
 -379
 -380
 -381
 -382
 -383
 -384
 -385
 -386
 -387
 -388
 -389
 -390
 -391
 -392
 -393
 -394
 -395
 -396
 -397
 -398
 -399
 -400
 -401
 -402
 -403
 -404
 -405
 -406
 -407
 -408
 -409
 -410
 -411
 -412
 -413
 -414
 -415
 -416
 -417
 -418
 -419
 -420
 -421
 -422
 -423
 -424
 -425
 -426
 -427
 -428
 -429
 -430
 -431
 -432
 -433
 -434
 -435
 -436
 -437
 -438
 -439
 -440
 -441
 -442
 -443
 -444
 -445
 -446
 -447
 -448
 -449
 -450
 -451
 -452
 -453
 -454
 -455
 -456
 -457
 -458
 -459
 -460
 -461
 -462
 -463
 -464
 -465
 -466
 -467
 -468
 -469
 -470
 -471
 -472
 -473
 -474
 -475
 -476
 -477
 -478
 -479
 -480
 -481
 -482
 -483
 -484
 -485
 -486
 -487
 -488
 -489
 -490
 -491
 -492
 -493
 -494
 -495
 -496
 -497
 -498
 -499
 -500
 -501
 -502
 -503
 -504
 -505
 -506
 -507
 -508
 -509
 -510
 -511
 -512
 -513
 -514
 -515
 -516
 -517
 -518
 -519
 -520
 -521

1 喜
3
、
二
夏解かい
八
3
0
王在
至

は
ま
り
こ
こ
ろ
こ
造
う
ん
一
見
子
ハ
全
っ
て

430(2018)6.18(A)~60(40)

正

④2479^P

④2481^P

2481, 2479^P

「新」(1)-112^P
2,473-1/2

ひび 敬更を表す 670^P 陵 2110^P
"1897

日新聞昭和六年四月十一日付参照
■ところで、
①「荒丘」という字は、^{大か}すさ²⁰⁴⁵と訓める。
②また、「陵」は、天皇・皇后・皇太后・太
皇太后の墓所のことである。「^ほ広辞苑」
へ陵^{みさぎ}という。
（^もまた母の根国の王）
（既述）
■そこでこの物語においては、
へ^{ほう}の^{てい}昔^る邪馬台国の王^さだった素戔嗚尊^{すさの}
が^{ほう}葬^らう^るを、^さ後代の人^う
々^{けい}は^い敬意を表^{ひよう}す。
と^し称^{しょう}したの^うう^う。
と^し稱^{しょう}したの^うう^う。
（^{すさのみさぎ}荒陵^さがあるいは^{すさのはか}荒墓^さ）
畿地方最古の前方後円墳？^{参照}
なお、
へ茶臼山が前方後円墳であるのか、否か
についての現時点までの調査結果については
追って述べたい。（第三十九章）
へ茶臼山の調査の項において述べたい）